

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 10 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520358

研究課題名(和文) 中世ドイツ文学の発信型研究の試み 日本文化を出発点として

研究課題名(英文) Medieval German Literature from the Perspective of a Japanese Scholar of German Studies

研究代表者

寺田 龍男(Terada, Tatsuo)

北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・教授

研究者番号：30197800

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では以下の知見を得た。

1. 軍記物語は西洋の英雄叙事詩研究に通常含まれない。しかしどちらも同様の内容を有しており、共通点も大きい。日本文化の中にあって軍記物語は他の形式では成立し得なかったことを具体例で示し、共通概念(英雄文芸)を用いることを改めて提起した。2. 近年研究が盛んなディートリヒ叙事詩の語彙研究を進めた。とくに『ウィルギナル』の一写本が収録されている「リーンハルト・ショイベルの英雄本」における語彙を網羅的に調査し、その使用傾向の一端を明らかにした。3. 『ニーベルンゲンの歌』をとりまく状況(近年大きく進捗する研究と教育)に関する現状を報告した。

研究成果の概要(英文)：This project yielded the following results: 1. The Gunki Monogatari (Japanese heroic poetry) is usually not the subject of 'Western' research on epics. However, Japanese heroic poetry and Western heroic poetry share common characteristics despite different literary traditions. Therefore, the Gunki Monogatari should be considered a variation of heroic poetry. The term heroic poetry would be an appropriate term to characterize both genres. 2. This project advanced the investigation of the vocabulary of 'Lienhart Scheubels Heldenbuch' (about 1480-90) and clarified some tendencies of "Virginal" and other works discussed in this manuscript. 3. Another paper related to this research project analyses the background of the "Nibelungenlied" boom in research and proposes to apply scholarly methods to other genres of medieval literature, especially with regards to successful online publication.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：中世ドイツ文学 異文化研究 英雄叙事詩 軍記物語 リーンハルト・ショイベルの英雄本

1. 研究開始当初の背景

中世文学研究者の間では「ディートリヒ叙事詩」に対する関心が1990年代後半から急速に高まっている。従来「英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』」に素材を与えた口頭伝承が文字文芸化した作品群」とやや見下されてきたジャンルで、個々の作品自体を独自の文芸作品として考察する研究がようやく始まったと言える。(ちなみにこの、ディートリヒ叙事詩を見下す見解は今日では否定されている。)

注目すべきはE. リーナート氏(ブレーメン大)らによる新たな校訂版の刊行プロジェクトである。すでに「ディートリヒの歴史叙事詩」(以下「歴史叙事詩」)では『ディートリヒの敗走』(2003年)、『ラヴェンナの戦い』(2005年)、『アルプハルトの死』(2007年)の三部作が刊行されている。信頼できるテキストが得られたことにより、今後さまざまな視点による研究が大きく発展することが期待される。その後ブレーメングループはさらに「ディートリヒの冒険叙事詩」(以下「冒険叙事詩」)の諸作品も刊行し、今後も継続する見通しである。

しかし作品(さらに個々の異本)の語彙分布及び構成原理の解明や、中世文学全体におけるディートリヒ叙事詩の位置づけ、受容の位相など、明らかにされるべき課題はなお多い。加えて私見では、他に例を見ないほど戦闘の描写が多い当ジャンルの諸作品においては、虚構とはいえ、紛争と調停・実社会で行われていた慣習・武具や戦法の描写・アジール等、歴史学などの観点からも興味深い描写が確認できる。それらの課題を解明するためにはディートリヒ叙事詩における語彙研究が必須である。そのみならず、日本では歴史学者もしばしば引用する軍記物語の史的側面と対比できる可能性がある。

報告者は近年の研究動向に対応し、また編纂作業にいささかでも資するため、上述の研究の進展に貢献する試みをつづけてきた。すなわち、従来ほとんど行われていなかった語彙分布の統計分析と並行して、日本における軍記物語の研究成果(口承文芸との関係・成立と書記伝承・文芸作品における社会の実相・紛争と調停など)を応用し、知見を伝えてきた。このテーマには内外の研究者から一定の関心が寄せられているが、課題はなお山積している。

以上が研究開始時点での背景であるが、助成研究を進める過程でディートリヒ叙事詩と強い関係にある『ニーベルンゲンの歌』の研究で大きな進捗があった。ウィーン大を中心とする研究者によって多数の写本の校訂版がオンラインで公開され、しかも同じページで写本ごとの異動を確認することが可能に

なったのである(2013年)。そのためこの偉業を含む近年の中世ドイツ文学に関する研究動向を、教育も視野に入れつつ分析することとした。教育も考慮するのは、戦後ドイツ・オーストリアの学校教育における『ニーベルンゲンの歌』の位置づけを考えることが、日本における同様の状況を考える際にも一定の意義をもつだけでなく、発信型の研究の裾野を広げるためにも重要だと考えるからである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、中世のドイツ文学(とくにディートリヒ叙事詩をはじめとする英雄叙事詩)を異文化現象としてとらえ直すこと、そして軍記物語等の研究成果に学びつつこれらを包括的に比較する方法論を構築し、その成果を海外に発信することである。作品やジャンルを分析する従来の研究の成果を十分考慮しながら、日本文化をふまえた発信型研究の展開を目指した。具体的には

(1) 従来顧みられることの少なかった分野で文献学的基礎研究を遂行・発展させること

(2) 「日本のゲルマニスト」として中世ドイツ文学研究の成果を再検討し、ドイツ語圏を中心とする海外の研究者に新たな視点を提起すること

(3) 中世文学に関する日欧共同研究の活性化を準備すること

以上3点を目的とした。

3. 研究の方法

本研究は以下の計画と方法で遂行した。

(1) ディートリヒ叙事詩で語彙分析の作業を行う。また分析を済ませたもののまだ結果と知見を発表していない諸作品について、順次報告する。(ただし新たな校訂版が予定されているものについてはその公刊を待って分析しなおす。)

いくつかの語野における語彙の分布に関して、報告者は旧版によるデータの収録をほぼ終えており、それらの分析結果の一部はすでに公表済みである。そこで新たに刊行されているディートリヒ叙事詩の諸作品についても、新たな校訂版を用いた分析と特徴の検証を行うこととした。

ただその新しい校訂版のうち、リーナート氏のグループが作業を進めてきた「冒険叙事詩」の『ラオリーン』は2011年によろしく刊行され、『ヴォルムスの薔薇園』も2015年3月になって刊行された。F. クラーグル氏(ニュルンベルク大)が2011年に刊行する予定だった『怪物』の新版は2015年5月現在刊行されていない。(同年8月刊行予定。)それら個々の新しいテキストによって旧データを見直す作業はもちろん必要であり意義もあるのだが、ジャンルの全体像を把握する前

に個別分析の結果を公表することは差し控えることとした。作品によっては新しい校訂版のテキストが従来のもものと比べて大きく変容し、新たな分析基準を立てる必要が生じると予想されるからである。そのため今回の助成期間内で十分な分析と考察を加えることは困難であると判断した。しかし公表には至っていないが、かつて旧版を用いて分析収集したデータを新版により検証・分析する作業は着実に進めることができた。

同時に、数年後に刊行が予定される「冒険叙事詩」の他作品（『ヴィルギナル』、『ズィゲノート』等）の特徴を異本の比較によって明らかにし、ディートリヒ叙事詩全体の傾向とジャンル内の個別的な性格に関する調査と分析を行うこととした。

なお報告者が従来から分析を進めている『ヴィルギナル』に関しては、写本レベルで踏み込んだ分析を行うことを目指した。具体的には同じ写本に書かれた他作品とも比較し、特定の語彙について写本独自の傾向を見出すことを目標とした。

(2) 異なる文化を背景に持つ者として中世ドイツ文学をとらえ直し、独自の視点による分析を行う。

ディートリヒ叙事詩、とりわけ「歴史叙事詩」は、当時の人々にとり「前時代史」だったと見なす見解がかつては有力だった。今日ではそうではないとする見方が大勢である。（ちなみにディートリヒ叙事詩は文字文芸としての性格が『ニーベルンゲンの歌』より強い。）その当否は措くとして、本研究が目指したのは、物語の中に古い時代の歴史的事実が反映されているかどうかの確認ではない。日本の軍記物語ではしばしば年号や日付の記載があるほか、登場人物の多くが実在していることから、「史実性」は比較にならないほど高い。これに対して中世ドイツ文学の作品はおしなべて虚構である。歴史叙事詩の『ディートリヒの敗走』が史書と見なされた例は一件確認されているものの例外というべきであり、こうした違いがしばしば比較（対比）の大きな障害となっている。

しかし比較や対比はけっして不可能ではない。本研究では作品内で看取できる紛争のプロセスの把握・理解・分析に重点の一つをおいた。それはとりもなおさず、歴史学者（の少なくとも一部）がコンフリクト研究のため文芸作品に注目しているからである。歴史研究でもっとも信頼に足るものは発行者・受給者・年月日・目的内容などが記された古文書である。しかしある紛争の始まりから終結までのプロセスについて、古文書の記録という「点」を集めて「線」を引くのは容易ではない。文芸作品は虚構作品であるから安易な利用はできないが、歴史学の成果を援用する

と、ディートリヒ叙事詩は好個の分析対象となる。なおここでいうコンフリクトとは、必ずしも武力を伴う紛争ではなく、人間関係の破綻のようなソーシャル・コンフリクトも含むものである。また部分的ながら、13世紀の作品成立当時の社会の実態を反映していると考えられる記述もある。本企画ではそれらの分析を行うこととした。

(3) 海外の研究者との交流を活発化させるため、その第一歩として、中世の日独両社会における抒情詩の位相について包括的記述を行う。これを通して現在ドイツで進行中の歌集（13世紀成立）の編纂企画に協力することを目標とした。

4. 研究成果

まず論文により、本企画の目的と研究の独自性を示した。内容は以下の通りである。

(1) 語彙研究

報告者は今回の助成研究を始める前からディートリヒ叙事詩『ヴィルギナル』（13世紀成立）の使用語彙に関する研究を行っている。この作品には、いずれも15世紀に書かれた主要3写本（V10・V11・V12）があるが、本研究ではウィーン写本（V12：全体は「リーナルト・ショイベルの英雄本」と呼ばれる）に掲載された全作品における「戦士」に関する語彙の比較を行った。その理由は、戦闘を主題とする作品群ではこの語野が大きな意味を持ち、作品の構成原理の解明にきわめて重要であることはもとより、一人の写字生によって全体が書かれているため、複数の人物による書写の場合よりも個性が把握しやすいと考えられるからである。そこで各作品について、当該語彙（helt, degen, recke, wigant, ritter）が1000行当たり何回の頻度で出現するかを調査した。その結果、これらの語彙の分布と付加される形容辞（語彙）の使用傾向を明らかにできた。とくに wigant については顕著な特徴が認められた。写本筆者ないしは写本の制作依頼者の嗜好の反映と見ることが妥当と思われる。さらにこの写本の『ヴィルギナル』ではキリスト教の聖人が高い頻度で出現することに着目し、写本に掲載されたすべての作品についても調査し、聖人別の頻度を確認した。同時に調査した他のいくつかの英雄本ではこのような傾向が見られないため、聖者の頻出は「リーナルト・ショイベルの英雄本」独自の傾向と思われることも報告した。現在さらに、この傾向が何に由来するかを調査している。（以上論文、 ）

(2) 日本のゲルマニストとして目指すもの未発表であるため概略にとどめるが、歴史学者 G. アルトホフ氏（ミュンスター大）らが提起したコンフリクト研究に資すると考えられるモチーフや記述は歴史叙事詩には数多く認められる。それは3作品でいずれも主従関係のあり方が大きなテーマとなって

いるからである。国家や地域を一元的に支配し、人々を強い力で押さえつける権力がなくなると、あるいは統治者にその力がなくなると、人は簡単に離れて行くことが「歴史叙事詩」では如実に示されている。(日本史研究の佐藤進一氏が『南北朝の動乱』で活写した、南北朝期の混乱した社会における「離合集散」の分析が本研究に大きな示唆を与える。)いわゆる忠誠心に揺れがあるのは悪役(ヴィテゲヤハイメ)だけではない。それまで主人公ディートリヒに臣従していた者たちも、身に危険が及びかねないと感じると、受け取ったものを返上して主従関係を解消している。個々の登場人物を歴史上の人物と比定することはできないが、彼らの行動原理は作品成立当時の常識に従っていたことを前提にすべきである。少なくとも、社会通念を大きく逸脱するものではなかったと考えられる。もとより、すでに何度も述べたように虚構の作品であるため、時代背景を解釈と結びつけることには慎重であらねばならないが、歴史資料と違って「ストーリー」が描かれている意味は大きい。(関連論文)今後も研究成果を順次公表する予定である。

(3) 研究交流の活性化

英雄叙事詩の研究に関してはすでに国内・国外ともすでにそれぞれ複数の研究者と緊密な交流を行っており、今後さらに充実できる見通しである。また今回の助成研究を進める過程で、プレーメン大の若手研究者がドイツ研究振興協会に申請する研究プロジェクトへの参加依頼を受けた(分担金なし)。ただ報告者の研究をあらゆる面でさらに大きく前進させるためにはネットワークのさらなる拡大と交流の質的向上が必要である。この点は今後の課題としたい。

本研究の開始後に、中世ドイツ文学をめぐる研究と教育に関して現在進行している大きな変化についての新たな情報と知見が得られた。本研究の課題と密接に関連するテーマであるので研究ノートとして公表した。(論文)

なお当初の目的のひとつは、ドイツで二つのグループが企画する、中世に成立した抒情詩集の校訂版編纂に貢献することであった。そのうち一つは残念ながら解散した。残る一方も現在(やむを得ぬ事情で)作業を中断している。しかし助成期間中の発表には至らなかったものの、西洋圏の中世文学研究者に日本中世の抒情詩(具体的には『古今和歌集』などに見られるいくつかのテーマ)との比較対比の可能性を提示する考察を開始した。中世社会ではどこでもそうだったように、抒情詩の主要なテーマである恋愛は、宮廷物語や英雄叙事詩など他のジャンルでも一定の役割を担っており、比較の限りない可能性をはらんでいるからである。この企画にはすでに複数の研究者が関心を寄せており、今後共同研究に発展することが期待される。

(4) 研究成果の公開状況

下記論文のうち 以外は、報告者の勤務校の図書館ホームページ HUSCAP で公開されている。この機関リポジトリにおける 2015 年 6 月 1 日現在のダウンロード数は以下の通りである。論文 180 回、191 回、248 回、590 回、1431 回。

なお平成遠友夜学校から機会を与えられ、「中世ドイツのいくさ物語」および「中世ドイツのいくさ物語(2)」と題して 2014 年 11 月 25 日と 2015 年 2 月 17 日の 2 度口頭発表を行った。これにより、助成研究の成果の一部を一般市民に向けて発信することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6 件)

寺田龍男、中世ドイツ文学の研究と教育—『ニーベルンゲンの歌』をめぐる近年の学術出版状況から—、北海道大学大学院教育学研究院紀要、査読無、121 号、2014 年、1-15

DOI: 10.14943/b.edu.121.1

Tatsuo Terada、Die Heiligen in Lienhart Scheubels Heldenbuch、メディア・コミュニケーション研究、査読無、65 号、2014 年、1-12

URI: <http://hdl.handle.net/2115/53599>

寺田龍男、「リーンハルト・ショイベルの英雄本」をめぐる諸問題—日本人ゲルマニストの立場から—、北海道大学大学院教育学研究院紀要、査読無、118 号、2013 年、179-193

URI: <http://hdl.handle.net/2115/52898>

Tatsuo Terada、Zum Wortschatz in Lienhart Scheubels Heldenbuch、Neue Beiträge zur Germanistik、査読有、11-1 号、2012 年、101-114

URL:

<http://ci.nii.ac.jp/naid/110009561823>

Tatsuo Terada、Zur Faktizität in der japanischen Heldendichtung Gunki-monogatari、独語独文学研究年報、査読有、38 号、2012 年、19-25

URI: <http://hdl.handle.net/2115/49069>

寺田龍男、中世ドイツ文学の発信型研究の試み—日本文化を出発点として—、メディア・コミュニケーション研究、査読無、61 号、2011 年、169-184

URI: <http://hdl.handle.net/2115/47577>

[学会発表](計 1 件)

寺田龍男、「リーンハルト・ショイベルの英雄本」に関する諸問題、北海道ドイツ文学会第 75 回研究発表会 2012 年 12 月 15 日、北海道大学(札幌市)

URI: <http://hdl.handle.net/2115/50949>

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

http://www.edu.hokudai.ac.jp/teachers/teacher_introduction_8_teachers_profile.html

6. 研究組織

(1)研究代表者

寺田 龍男 (TERADA, Tatsuo)
北海道大学、大学院メディア・コミュニケーション研究院、教授
研究者番号：30197800

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし